

⑪ 『奇跡』

夜が明ける前に、日中の好天を予感させる強い冷え込みで目が覚めた。かいまきを通して、容赦のない寒気がミチを攻めた。

その予感どおり、東の空に僅かな明るみが兆した空に、まばゆいばかりの明けの明星がきらめき、西の空には糸を引いたような三日月が、今にも伊吹山の嶺に隠れるところだった。澄み渡った空に、近づく夜明けに抗うように輝く星の光を遮るものは何も無い。

傘狂の家の一室に寝起きをするようになって十日余りが過ぎた。この日、ミチは兄弟子の百茶坊に連れられて洞(ほら)に住む同門の俳人を訪ねることになっていた。

百茶坊の来訪を待ちながら書物に目を落としていたその時、遠くで騒ぐ異常な人の声が耳に届いた。

何事だろうと顔を上げると、廊下を慌ただしく小走りに急ぐ女中の足音がした。

「何事かあったのですか？」と障子を開けたミチに、女中のおみねが

「おとよさんの子供が大池でおぼれたらしいのです。今しがた一緒に遊んでいた子が報せに来て、おとよさんが飛んでいきました。心配なので私も様子を見に行きます」と

と応えた。

おとよは、傘狂の家に野菜を届ける近所の農家の女房だった。数日前にミチも顔を合せていた。

おみねの言葉を聞いた瞬間、故郷粟野川で見た出来事が思い出された。

うなぎを獲りに川に入った少年が深みにはまりおぼれたのだ。一緒に居た連れの少年の報せで、近くで農作業をしていた男がおぼれた子供を引き上げ、懸命に水を吐かそうとした。

そうしながら男は、半べそで傍に立っておろおろしている少年に向かって、ミチの父親を呼んで来るように言いつけた。報せを受けた由永は、ミチに台所から箸を一膳持ってこさせると、自分が座っていた座布団を小脇に抱え家を飛び出して行った。

ミチも、ドキドキと早鐘を打つ胸を両の手で抱えながら由永の跡を追ったのだった。

役に立つことが有るかもしれない、とおみねの跡を追って部屋を飛び出したミチは、由永がしたと同じように、座布団を抱え、箸を握って堤へ向かう道を走った。

堤の脇には一緒に遊んでいたらしい子供が三人抱き合っていて泣いている。

その傍では、おとよが

「竹蔵ッ、タケゾーッ」と子供の名を大声でわめきながら、

おぼれた子の背中をさすって水を吐かそうとしていた。

二人に駆け寄ったミチは、手のひらを少年の鼻にかざし呼吸を確かめた。

息が無い。次に由永がやった事を思い出しながら、子供の胸をただけると自分の耳を押し当てた。既に心臓の鼓動もなかった。

駄目かもしれない、だがやってみるしかない。

持って来た座布団を二つに折って地面に敷いておいて、おとよの腕から子供を引きはがすと、濡れた着物を剥ぎ取り丸裸にした。

おとよに、頭に巻いている手ぬぐいで子供の濡れた身体を拭くように言い、おとよが泣きわめきながら少年の体の水気を拭き取っている間に、ミチは自分が着ていた着物を脱ぎすてて肌着姿になった。

脱いだ着物で少年を包むと座布団の上に顎が上に向くよう位置を確かめて寝かせ、箸を横に口にくわえさせ両の手を重ねて子供の胸にあてがった。

ヒーフーミーヨーイツ、ム。ヒーフーミーヨーイツ、ム。

ミチは少年の胸を押しした。

ヒーフーミーヨーイツ、ム。ヒーフーミーヨーイツ、ム。

ミチは何度も何度も繰り返して押し続けた。

やがて周りには、報せを聞いて駆け付けた村の衆の人垣ができた。隣り村まで出掛けていた父親は青ざめた顔に目が吊

り上り、息を切らして駆けつけ、子供の脇に崩れ込むと悲鳴にも似た声で

「竹蔵ーッ死ぬんじゃねえぞ」と叫んだ。

ヒーフーミーヨー。ミチはそんなことには構わず子供の胸を押し続けた。

だが誰もが、心の臓が動いていない少年は、もう助からないことを知っていた。おぼれてから既に、可なりの時間が過ぎてしまっていたのだ。

おとよはミチの腕をつかむと

「もういいです。もう充分です。竹蔵は死んだのです。」と肩を震わせながら言った。

おとよの声は聞こえていたが、ミチは構わず子供の胸を押し続けた。

周りを取り囲んでいた村人も

「諦めんとしようがないな」と口々に呟いた。

ミチの目から涙があふれて少年の胸に置いた手の上に落ちた。それでもミチは、少年の胸を押し続けることをやめなかった。

誰もがあきらめ、父親がミチの腕をつかんで立たせようとしたその時、奇跡は起こった。

諦めないでよかった、と思った。息を吹き返した男の子に、おとよと父親が覆い被さって泣いていた。

周りを取り囲んだ村人たちも、まるで自分の命が助かったように、手を取り合い、肩を抱き合つて喜びあつた。

ややあつて、やつと見た事も無い断髪の女の存在に気付いたように

「どなたか存じませんが、村の子供を助けて下さり有難うございました」と初老の男が声をかけた。

するとその言葉に促されるように、他の村人たちが一斉にミチを取り囲んで、口々に

「本当にありがとうございます」「誰もが諦めていたのにまるで神業です」などと言いながら礼を言つた。

おとよと父親は男の子にしがみついたまま顔だけをミチに向け

「傘狂先生のお客人、菊車さんといわれましたね。ご恩は一生忘れません。本当にく有難うございます」と顔を涙でくしゃくしゃにして頭を下げた。

ミチは、子供の頃に粟野川で見た光景をもう一度頭に思い浮かべた。そしてその時、父親の由永が帰りの道すがら話したことを反芻してみた。

「飲んだ水はやがて小便になつて出てしまう。水を吐かせるより止まった心臓を蘇らすことが先じゃからな。」その言葉を信じて、由永がやつたように胸を押し続けた。

それが奇跡を呼んだのだ、と思つた。

兄弟子の百茶坊は、先に戻つたおみねから話を聞いていたらしく、ミチの顔を見た途端に

「大変な活躍だつたらしいですな。」と声をかけた。

「それにしてもそんな人助けの業をどこで取得されたのですか。」とも言つた。

「父に医術の心得があり、それを真似ただけですけど、役に立つてよかったです。」と応えてミチは大急ぎで、百茶坊と約束の洞に出掛ける支度に取りかかった。

岩手に来てひと月が過ぎた。傘狂はその間に、ミチが北陸、東北の行脚に出ると云う覚悟の度合いをじっくりと見極めていた。

傘狂にすれば、ミチをたつた一人で辺土に送り出す勇氣を持ち兼ねていたので。

無理も無い、それなりの年齢を重ねた尼や女俳諧師の旅の話は聞いている。それとてどれも一人旅ではない。必ず連れや弟子が居た。

「一人で旅を成就させる事が修業であり夫の供養です」とミチは言う。言っている事は判る。だからと言つて、それでは「行つていらつしやい」とそう易々とは言えなかつた。

昨日、ミチはこうも言つた。

「例え道端に死んだとしても、屋根が有るか無いかの違いだけ。私にとって屋根は月であり星である方が有難いのです」

その言葉を聞いて傘狂は

「もはや止めることは叶うまい。男といえども一人旅となると臆するもの。だけど菊車は男以上に強い」と思った。

翌朝傘狂は、登城の前にミチを呼んで旅立ちを許すこと伝えた。

傘狂の前に神妙に頭を下げているミチは、それを聞いた途端に満面の喜色をたたえた顔を跳ね上げ、再び畳を舐めるように頭を下げた。

願いがかなったのだ。

許しが出ると、それからの毎日は途轍もなく慌ただしかった。僅かひと月余りの間に知り合った近在の俳人や村の衆達が次々にやって来ては別れを惜しんだ。

その数の余りの多さに師の傘狂もあきれてしまった。これでは旅の仕度もままならない。まるで人気歌舞伎役者の顔見せである。

傘狂はそれでは、と近くの願證寺の本堂を借りて一気に別れの会を催す事にした。句会のつもりだったが、聞きつけた村人や近所の衆まで集まって、本堂ははち切れんばかりの人で溢れた。

その有様を見て傘狂は、これは奇跡だと思った。初めての句会で、老俳諧師との丁々発止で一気に話題の人になった。

加えて、村の子供を助けたことで瞬く間に村人の人望を集めることになった。

その人ごみの中には無論おとよと男の子の姿もあった。おんな衆はミチの手を取り、袂をつかんで引き止めた。

ひとり旅など無茶だと言う。女達の涙の聲が堂に溢れ、つられて目頭を押さえる男達もいて、いつはてるとも知れない別れが夜更けまで続いた。